

「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

——在日韓国朝鮮人の若者のアイデンティティについて——

狩 谷 あゆみ

(受付 2000年5月10日)

I 問 題 設 定

民族的アイデンティティ，エスニック・アイデンティティ……。アイデンティティ論というアプローチから，在日韓国朝鮮人（以下，「在日」）問題の研究は，多くの研究者によって行われてきた。

代表的なものをあげれば，福岡安則は，「在日」の若い世代を中心として，エスニック・アイデンティティのありように焦点をあてて聞き取り調査を行っている。福岡は「在日」の若者のアイデンティティの葛藤状況を「同化志向」／「異化志向」という二つの概念を対概念として用いることで説明している。

「祖国志向」の若者たち，「同胞志向」の若者たち，「共生志向」の若者たち……という順番で，いわゆる「民族意識」が強く内面化されている。「帰化」していく若者たち，「個人主義の」若者たち……という順番で，いわゆる「同化意識」が強く内面化されている〔福岡安則，1993：104〕。

福岡安則は「在日」の若者のアイデンティティを，民族的文化の継承，民族教育を受けた経験の有無，家庭環境などに基づいた，名前，国籍などに対する彼ら／彼女らの意識から，「民族意識」の強弱，「同化意識」の強弱を「測る」ことで明らかにしようとしている。

また，金泰泳は「在日」の民族的アイデンティティを，日本社会における差別・抑圧に対する抵抗として捉えている。金泰泳は「奪われた文化の

回復」「民族的自覚や誇り」「祖国とのつながり」を内実とする、一枚岩の「在日」の民族的アイデンティティの言説は、「帰化者」「混血」の人々の出現によって虚構として解体し、現在の「在日」の民族的アイデンティティは、「在日」個々人によってその捉え方が異なっていき、柔軟で弾力性のあるものになっていると捉えている。

人は、そのそれぞれの境界を貫いて通るベクトルの上を、状況対応的に自らの位置を定め、自在に複数世界を往来しながら毎日を生きている。それは本質主義か非本質主義かといった、二項対立的なものではなく、柔軟で、弾力性のある〈選択〉である。そして、そうした生きるための戦術を彼らは、理念によってではなく、現実世界、日々の生活の中から編み出しているのである〔金泰泳, 1998: 52〕。

しかし、アイデンティティは、民族的アイデンティティ、エスニック・アイデンティティという名で示されるように、内面的に常に所持されているものではなく、当然のことながら実体として存在するものでもない。アイデンティティは、福岡の言うように「民族意識」「同化意識」の強弱によって「測れる」ものではなく、金泰泳の言うように「生きるための戦術」を編み出すことで、確固たるものになるというものでもない。本稿では、アイデンティティを、「在日」の若者が、自己を問われる状況に遭遇した際に、他者（周囲の「在日」、日本人）との関係性の中で問題となるものとして位置づける。

本稿では、名前や国籍、「在日」としての生き方といった、「在日」としてのアイデンティティを問われる状況に遭遇した際に、「在日」の若者がどのようにアイデンティティを維持し、管理しているのかに焦点を当てていく。ここで本稿のタイトルについて説明しておく。「在日」の若者たちが自己を問われた際に、「在日」であることを示そうと試みること（民族名の使用や国籍へのこだわりなど）が「在日をする」ということである。そして、本人たちが望むと望まざるとに拘わらず、「在日」的な生き方を志向してい

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

くこと（日本名使用の説明や他の同胞と同じような生き方など）が「在日になる」ということである。そして、彼ら／彼女らの意図とは無関係に自己を問われる状況に遭遇せざるを得ないこと（日本名使用は本人に隠す意図がなくても結果として隠したことになるなど）が「在日であること」である。

ここでは、韓国籍／朝鮮籍を所持している場合も、父親か母親が日本人で日本籍を所持している場合も、「在日韓国朝鮮人」と総称して呼ぶ。そして、彼／彼女らがさまざまな場面で問われているのは、朝鮮人／韓国人としてのアイデンティティではなく、在日韓国朝鮮人としてのアイデンティティである。

本稿では、「在日」に対する差別問題に取り組む運動体であるMの会での参与観察で得たデータを事例とする。Mの会は、大阪府T市に1972年に発足した。T市には、第二次世界大戦末期、旧日本陸軍の地下秘密工場として多くの朝鮮人に強制労働させ、建設させた地下倉庫がある。この時期に、労働者の家族も含め2万5千人から3万人に及ぶ朝鮮人がT市にいたと言われている。戦後も、工事に従事させられた朝鮮人の一部がT市内で引き続き生活するようになり、「在日」集住地域を形成した。こうした「在日」集住地域は、T市の環境整備事業から除外され、長い間劣悪な生活環境に置かれていた。都市化の波に取り残された「在日」集住地域の生活改善も運動の発端となっていた。

また、Mの会は、「在日」一世を対象とした識字教室、小学生、中学生を対象とした子ども会、高校生部会、青年部、オモニ（母）の会等を通して、差別問題に取り組んでいる。中でも、子ども会と高校生部会、識字教室等は、1982年から「T市在日韓国・朝鮮人教育事業」として、T市教育委員会の事業として行われている。子ども会は、T市内の「在日」集住地域にある地域子ども会と、「在日」の子どもが多く通う小中学校に設置されている学校子ども会とがあり、差別に負けず立ち向かって生きていくこと、社会で生きていく力（学力保障も含め）を養うこと、子ども同士の仲間関係

を築くことを目的としている。

ここで取り上げる「在日」の若者は、子ども会に通っていた経験がある、子ども会指導員をしているなど、何らかの形で運動体に関わる人達であり、「在日」の若者の中ではむしろ少数派であると言える。そういう意味では、ここで取り上げる「在日」の若者たちは、限定された存在である。

なお、使用するデータは、テープレコーダーでの記録ではなく、筆者自身が参与観察を行う中で話を聞いた後に記述したものである。筆者が参与観察を行い始めたのは、1992年からであり、ここで用いた主なデータは、地域子ども会や青年部の活動、中学生や高校生を対象とした合宿に参加することによって収集している。なお、名前は全て仮名にしてある。

Ⅱ 名前／国籍に対する意味付け

従来から、「在日」にとって、名前の持つ意味は、非常に大きなものとして捉えられてきた。そして一般的には、「在日」にとって、民族名を名乗ることは「在日」であることを明らかにすることを意味し、また、日本名で生活することは、例え本人にその意図がなくても、「在日」であることを隠すことを意味すると解されてきた¹⁾。つまり、民族名は、「在日」が自らの出自を明らかにする記号として意味を持っているのである。とりわけ、従来の「在日」をめぐる運動や人権教育においては、民族名の使用は、それ自体が一つの目的として認識されることが多かった。多くの「在日」が、自らの出自を隠し、日本名を名乗って生活してきた（生活させられてきた）日本社会において、「在日」をめぐる運動や人権教育が行われる中では、民族名を名乗り、自らの出自を明らかにして生きていくことは、自らが「在日」であるということに誇りを持って生きていくために、そして日本人の

1) 名前については一般的には、本名、通名と表されることの方が多いが、本稿では日本籍の「在日」に関するデータも使用しているため、民族名、日本名というカテゴリーを使用する。ただ、データの中で本名、通名というカテゴリーが使用されている箇所はそのまま記述している。

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

「在日」に対する差別や偏見をなくしていくために必要なこととして位置づけられてきたのである。特に公教育の場で、教員が「在日」の生徒に対して、民族名を使用するように指導するケースでは、学校では「在日」の生徒が民族名を名乗っても、卒業して企業に就職する際には、再び日本名へと変更せざるをえないといった、矛盾した結果を生むことも少なくなかった。

Mの会では、民族名を名乗ることを子ども達に強要はしないが、子ども会指導員や青年部のメンバーなど、民族名で生活している「在日」の存在によって、また、子ども会活動で名前についての話し合いが行われる中で、民族名を名乗ることを期待されていることが、子ども達自身に内面化されている。

本章では、Mの会に所属する「在日」の若者の中で、日本名で生活する若者、日本名と民族名を使い分ける若者、日本籍で日本名で生活している（帰化した父親をもつ）若者を事例として取り上げる。三人とも、小学生、中学生の時期にMの会の子ども会に参加していた経験を持つ。ここでは、それぞれの若者の名前、国籍に対する意味づけを見ていくことによって、彼ら/彼女らがどのようにアイデンティティを維持・管理しようとしているのかを考察していく。

下記の話は、Mの会に所属する、日本名で生活しているある男性が、民族名で生活している「在日」の一人から「なぜ本名にしないのか？」と聞かれたときの彼の回答である。

M（の会）にいる奴って本名にしてる奴多いけど、俺は本名使うの嫌いやねん。俺にとっては、本名も通名も、両方自分の名前やし。今まで「ナカムラ・マサヒデ」で生活してきたし、親にも友達にも「マサヒデ」って呼ばれてるから、これからも変えるつもりはないわ。別に、韓国人やっていうのを隠して生活してるわけとちゃうしな²⁾。だいたい、なんで韓国人であかんねん。たまたま日本に韓国籍の人間が住

2) しばしば「在日」は、「在日」をさして、「朝鮮人」「韓国人」といった言葉を使用するが、「本国の朝鮮人／韓国人」を意味してはいない。

んでるだけやんか。

[日本名・中村正英, 民族名・韓正英 (ハン・ジョンヨン),
21歳, 1993年8月20日] (括弧内筆者)

民族名で生活している「在日」からの「何でお前は本名にせえへんねん?」という問い自体に, 「『在日』であることを周囲の日本人に隠すために, 通名にしているのではないか?」という意味が含まれていることを, 彼自身は自覚している。それゆえに, この場面において, 彼は「『在日』であることを周囲の日本人に隠すために, 通名にしているのではない」ということを, 民族名で生活している他の「在日」に対して説明しなければならない状況に追い込まれている。彼は「本名を使うのが嫌いだから」「今までナカムラ・マサヒデで生活してきたし, 親にも友達にもマサヒデと呼ばれてるから」ということを, 民族名にしない理由としてあげている。さらに「『在日』であることを周囲の日本人に隠すために, 通名にしているのではない」ということを強調するために, 「なんで, 韓国人であかんねん」「たまたま日本に韓国籍の人間が住んでるだけやんか」と言っている。ここで彼が用いている「韓国人」「韓国籍」という言葉は, 他の「在日」, とりわけ民族名で生活している「在日」に対して, 〈自分も同じ「在日」という所属集団の一員である〉ということを表示するために用いられているメッセージだと解釈することができるだろう。

また, 以下にあげているデータは, 中学生を対象にした中学生合宿での交流会で³⁾, 名前について話し合った後に, 子ども会指導員とボランティア

3) 中学生合宿とは, Mの会が行っている「在日」の中学生を対象とした合宿で, 学力向上と子ども同士の仲間関係を築くことを目的としている。夏休みには, 一年生から三年生を対象として, 三泊四日のうち, 昼間は勉強(最終日の午後は遊び), 夜は交流会として自己紹介を兼ねたゲームや, 名前, 国籍について, 中学校での日本人の友達との関係, 家族のこと, 将来の夢, 恋愛や結婚についてなど, テーマを決めた話し合いが行われる。話し合いのきっかけとして, 高校生や, Mの会の指導員, 青年部のメンバーなどが, 子どもの頃, 中学生の頃の話から, 現在までの話をすることがある。

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

数人で話をしていた際のものである。

下記の女性は、話を聞いた時点では、Mの会の子ども会指導員をしていて、朝鮮学校やMの会では民族名を名乗っていたが、それ以外の日常生活では主として日本名を使用していた。

M（の会）にいる人や、子ども会の子達は、ずっと日本の学校に通ってるけど、私は幼稚園から大学まで朝鮮学校やったから、学校では「イ・ユンミ」って呼ばれてた。けど、家では「ユミ」って呼ばれてたし、私にとっては、本名と通名はどっちも自分の名前って言うか、使い分けてることに別に疑問はないねん。病院とかで「マルヤマ・ユミさん」って呼ばれても、「ああ、あたしあたし」って感じやし。……私は、国籍とかもそれぞれ自分の好きなようにしたらええと思うねん。彼氏の家はみんな帰化しているけど、私は帰化せえへん。向こうの親も「別に好きなようにしい」って言ってる。

[民族名・李由美（イ・ユンミ）、日本名・丸山由美、
26歳、1995年12月27日]（括弧内筆者）

李由美は、上記の中で「本名と通名を使い分けてることに疑問はない」と言っている。しかし、他の子ども会指導員やボランティアの学生から「彼女が『在日』であることを知っている人しか居ない場所では民族名を使用しているけど、日常生活の多くの場面で日本名を使用しているということは、日本人の前では『在日』であることを隠しているのではないか」と思われていることを、彼女自身も自覚している。ここで、彼女は「『在日』であるということを隠すために、本名と通名を使い分けているのではない」ということを敢えて説明しなければならない状況に追い込まれている。彼女は、名前の使い分けに関して「家でも日本名で呼ばれていた」「使い分けていることに疑問はない」と言った後で、「国籍とかもそれぞれ自分の好きなようにしたらええと思う」と話題を帰化の問題へと切り替えていく。この場面における「彼氏の家はみんな帰化しているけど、私は帰化せえへん」という語りは、彼女が直面している集団（他の子ども会指導員やボランティア

たち)の彼女に対する役割期待に沿った生き方をしていくという、ある種の決意表明であると解釈できる。すなわちこの場面で、彼女が「帰化せえへん」という自身の国籍へのこだわりを示すことは、直面している所属集団に対して「在日をする」という意思表示であり、それによって名前の使い分けによって遭遇している、自己を問われる状況から脱却しようと試みているのである。

下記に示している渡辺亜紀の場合は、父親が「在日」、母親が日本人である。父親は彼女が生まれる以前に帰化している。この場面は、中学生を対象にした中学生合宿での交流会で、中学生の前で彼女が中学生生活や高校生活について話をする機会があった際のものである。

中学のときは、ボクは⁴⁾、ずっと自分が日本籍で日本の名前やいうことを、引け目に思ってたところがあったと思う。中一のときに、尹さんが本名で行ってるのを見て、「どうしよう。でも自分は日本名やし」って思ってあせってた。母親に「ボクには本名あんの？」って聞いたら、「あるよ」って言われた。兄貴は父親の通名の「田中」のときもあって、韓国籍のときもあったらしいねんけど、ボクが生まれる時には父親が帰化してたから、ボクは生まれたときから日本籍で、母親の名字の「渡辺」やねん。でも父親の本名が「梁(ヤン)」っていうのを聞いて、「みんなにあるものが自分にもある。自分もいっしょなんや」って思うきっかけになった。高校に入ってから、オリニ(子ども)キャンプに参加して⁵⁾、子ども達が自分に頼ってくるっていうか、遊ばれてるだけやってんけど、「自分がそこにいるだけでこの子達が安心できるんやったら、居よう」って思った。そのときは、「韓国人でよかった」って思った瞬間かなあ。

[渡辺亜紀, 高校一年生, 1997年8月26日] (括弧内筆者)

- 4) 渡辺亜紀は、自分のことを「ボク」と言う。彼女が自分のことを「ボク」と言うのは、周囲の日本人からの距離感や、「在日」からの距離感を示しているのかもしれない。
- 5) オリニキャンプとは、Mの会が夏休みに行っている、小学生対象のキャンプのことである。渡辺亜紀は、高校一年の夏に「手伝い」という形でオリニキャンプや中学生合宿に参加していた。

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

渡辺亜紀は、韓国籍／朝鮮籍や民族名を所持している「在日」に対して、それらを全く所持していない「日本籍で日本名である」自分の存在が、「引け目」となっていたのである。彼女は、子ども会では韓国籍／朝鮮籍、民族名を所持する他の「在日」の存在によって、中学校では民族名で生活しているクラスメイトの存在によって、自己の「在日」としての手懸かりを模索せざるをえないようになったのである。彼女にとっては、自分が所属している（と思いたい）「在日」同胞の集団を準拠集団として内面化することによって、その集団の準拠枠と照らした場合、その集団への所属を明示する国籍や民族名という、（彼女自身にとっての）確かな手懸かりが見あたらなかったのである。上記の中で、彼女は「渡辺亜紀」という名前が「本名」であるにもかかわらず、母親に「ボクに本名あんの？」と尋ねたと言っている。そして彼女には、母親から聞いた「梁」という父親の民族名の存在が「在日をする」ための重要な手懸かりとなっているのである。彼女が、父親の民族名を知ったことを「みんなにあるものが自分にもある。みんなといっしょなんやと思うきっかけになった」と言い、また、高校に入学してからMの会の子ども会活動を手伝うようになって、「韓国人でよかったと思った」とまで言っていることから、彼女にとって父親の民族名を発見したことが、彼女の「在日」としてのアイデンティティを維持・管理していく上での重要なファクターとなっていることが示されている。

本章では、Mの会に所属する「在日」の若者の中で、日本名で生活する若者、日本名と民族名を使い分ける若者、日本籍で日本名の若者を事例として取り上げた。ここで取り上げたデータの中で、中村正英と李由美は、「日本名を使う」「日本名と民族名を使い分ける」ということに関して、何らかの説明をしなければならない状況に遭遇している。その際、二人は、民族名を名乗っている「在日」に対して、「日本名を使う」「日本名と民族名を使い分ける」ということを説明するために、「韓国籍である」「帰化しない」というメッセージを表示することによって、同じ「在日」として生きている（生きていく）ということを確認しようとしている。また、渡辺亜

紀の場合は、自らの「在日」としての手懸かりを模索せざるをえない状況に直面し、母親から帰化した父親の民族名を聞き出したことから、「父親の民族名の存在」を自分自身の「在日」としての手懸かりとして意味づけようとしている。三人に共通しているのは、「在日」としてのアイデンティティを問われた際に、「国籍」や「民族名」が、「在日をする」ことを表明するための言説において、何らかの形で重要な資源として用いられていることである。そうすることによって、彼／彼女らは、所属集団である「在日」同胞への帰属を表明するとともに、自己のアイデンティティを維持・管理しようと試みているのである。

Ⅲ 民族名の使用／日本名の使用によって生じる問題

本章では、小学校まで日本名、中学校三年間は民族名、高校入学を期に再び日本名にした高校生を事例として取り上げる。彼女は、民族名は尹恵美子(ユン・ヘミジャ)、日本名は中谷恵美子である。ここで取り上げているデータは、彼女が高校一年生のときのものであり、既に「中谷恵美子」という日本名で生活しているときのものである。そして、彼女が中学生を対象とした夏休みの合宿での交流会で⁶⁾、中学生、教師、子ども会指導員などを前に、中学のときのこと、高校での生活について話した際のものである。

中学に入ったときから本名にしてんけど、「なんで本名にしたん？」って友達に聞かれることもあんねんけど、Y君とか、(地域)子ども会の中でも本名で行きだした子がいて⁷⁾、すごく本名にするっていうのが、自分の中で大きかってん。(地域)子ども会に行くのは、すごく楽しかったし、自分もすごく本名にしたかった。名前のことでは、

6) データを収集したのは、1997年8月27日である。中学生合宿については、先述。

7) 地域子ども会は、T市内の「在日」の集住地域三か所にあり、小、中学生を対象に、週三回活動している。学校子ども会は、T市内の「在日」の子どもが多く通う小、中学校に設置されている。

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

お母さんとはすごいけんかになったけど、無視して中学から本名に変えてん。(括弧内筆者)

彼女は、中学入学を期に民族名を名乗っている。ここで、彼女は、自分が「(地域)子ども会に行くのは、すごく楽しかった」と言っているが、それは、彼女にとって(地域)子ども会が「在日」であるということを周囲に説明する必要のない場所だったからだろう。子ども会への関わりの中で、「Y君とか、子ども会の中でも本名で行きだした子」の存在によって、彼女は自分が日本名を名乗っていることを、どことなく「引け目」に感じるようになり、日本名で生活している「在日」としての自己を問われるようになったのであろう。つまり、民族名で生活している「在日」から、「通名を使うことは、在日であることを隠しているのではないか」と思われているかもしれないことを、彼女自身は自覚していたのである。だからこそ、彼女は「本名にするっていうのが、自分の中で大きかった」「自分も本名にしたかった」と言っているのである。

最初は変な感じっていうか、すごくやりにくかってんけど、I小からH中行ってるとか、(地域)子ども会の子とかがすごい支えになってん。でも、授業でアルファベット習ってて、「U」を習うときに、「お前のことやろ？」って言われて、泣きたくなるくらい悲しかってんけど、誰にも言えなかった。……本名にしたら、先生がすごい期待しているっていうか、自分が引っ張っていかなって感じになるからすごい嫌やった。本名のことは、クラスの周りの子とかは「触れたらあかん」という感じで。クラスに名前が「恵美子」という、うちと同じ字の子がいたし、みんな不思議に思ってるはずなのに、何も聞いてこうへんかってん。友達にはあだながあるのに、自分だけ「尹さん」とって、名字で仰々しく呼ばれるから、それがすごいさみしかってん。(括弧内筆者)

実際に民族名で中学校に通い始めると、彼女は、名前をもじられても「誰にも言えない」、名前のことをクラスメートたちが「不思議に思ってるはず

なのに誰も何も聞いてこない」「友達にはあだながあるのに、自分だけ名字で呼ばれる」「先生がすごく期待している」という、民族名を使用することで生じた軋轢を経験していく。そして、彼女は「なぜ本名で行きだしたか」、つまり自分が「在日」であるということ、クラスメイトや教師の前で、しばしば説明させられることを苦痛に感じるようになる。特に、学校で民族名を名乗っている彼女に対して教師から期待される役割に関して、尹恵美子は、中学二年のときに、以下のように語っている。

学校子ども会は、自分のことを考えている子がいるところへ、経験のない何も知らない先生を担当にする。自分がなぜ本名で行きだしたかを一から説明しなければならぬから面倒。教材に使われるみたいで嫌⁸⁾。[1995年8月24日]。

彼女自身にとっては、中学入学を期に日本名から民族名へと変更したのは、(地域)子ども会などで民族名を名乗っている「在日」から、「通名を使うということは『在日』であることを隠しているのではないか」と思われるかもしれないという状況、日本名を使うことに対して「引け目」に感じるという状況から逃れたかったからである。つまり、日本名を使って隠して生活していた彼女が、他の「在日」に対して、その理由を説明しなければならぬ煩わしさから逃れるために、民族名を名乗りはじめたのである。けれども、民族名を名乗ることによって、彼女自身は意図していなかった結果として、今度は周囲の日本人から民族名を名乗っていることについて説明することを期待されるようになる。このような民族名を名乗る際に

8) T市では、小学校・中学校・高校によっては、ホームルームや学年集会などで、他の生徒の前で、「在日」であるということ、所謂「本名宣言」をするということが一つの行事になっている学校もある。「在日」であるということ、これを日本人に説明することを、「在日」として生きていく自分の役割として捉え、苦痛に感じない(むしろ積極的に意義を見出す)「在日」も存在するが、実際には、中学校や高校で「本名宣言」によって民族名で生活し始めても、進学や就職の際に、日本名に戻す人たちもいる。

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

は予期していなかった期待に対し、彼女は次第に煩わしさを感じるようになっていく。そして、彼女は、高校入学を前に「本名か通名か」を迷うようになる。

友達には、高校に行ったら通名に戻そうかどうか迷ってるときにも何にも言えなくて、でも中学最後のホームルームのときに、「通名にしようかどうか迷ってる」ということをみんなの前で言ったら、「本名で嫌なことがあったら自分たちで守る」みたいなこととか、「本名でがんばって」とって、クラスの子に言われて、初めて本名名乗ってよかったって思った。友達から電話かかってきたら、家と名字が違うし、表札も違うし、カラオケ行って、自分の名前書かなあかんかったりするから、すごい普段でもすごい気い使わなあかんかったから疲れた。

彼女は、次第に日本名に戻せば、「在日」であるということを周囲に説明する必要がなくなるのではないかと考えていく。しかし、民族名から日本名に戻すことは、民族名で生活する「在日」から「『在日』であるということを周囲に隠そうとしている」と思われるであろうことを、彼女自身は気づいている。上記の中で、中学卒業直前のホームルームで、「通名にしようか迷ってる」という自分の考えをみんなの前で言えたこと、「本名で嫌なことがあったら自分たちで守る」「本名でがんばって」とクラスの子に言われたことを、彼女は民族名にすることによって得られた一つの成果として語る一方で、「普段でもすごい気い使わなあかんかったか疲れた」と言い、結局、高校へは日本名で通うことを選択する。

高校に行ってから、通名にしたのをすごい後悔してん。自分が「在日」やっていうことは、友達に言うチャンスはあんねんけど、なんかきっかけもなくて踏みきれない。言わなあかんなどは思ってんねんけど、なかなか言えんくて。で、今まで（中学三年間）は本名で行ってたから、隠して通名で行くのは初めてだから、どうしていいのかわからない。（「在日」だと）知られるのはいいねんけど、なんか言いにくい。H中のときの「ユン・ヘミジャ」のあたしを知ってる友達も大

事にしていきたいし、今の高校の友達も大事にしていきたいし、今はどっちも好きっていうか、なんで通名にしたのか、今は整理つかへんねんけど、名前をもじられたり、先生ともめたりするたびに、日本人やったらよかったなって思った。(括弧内筆者)

上記の場面で、彼女は先輩として、後輩である中学生に、民族名での中学生生活、日本名での高校生活について話をする立場にあった。彼女は、中学生や指導員などから、「高校では、『在日』であることを隠すために、民族名から日本名へと変えたのではないか」と思われていることに気づいている。だからこそ、彼女は、「在日」であることを隠しているのではないことを説明しようとして、「在日だと知られるのはいい」「今は(民族名も日本名も)どっちも好き」「ユン・ヘミジャのあたしを知ってる人も、高校の友達もどちらも大事にしたい」と言っているのである。

彼女は、日本人のクラスメイトや教師を前にして、「なぜ本名にしたのかを説明することが苦痛だ」と言っても、Mの会の中で「なぜ中学入学を期に本名にしたのか」を、そして「なぜ高校入学を期に通名にしたのか」を説明することを苦痛だとは言わない。実際に彼女の話聞いていた私には、彼女はそれを苦痛どころか言いたくて仕方がないかのように見えた。それはおそらく、彼女にとって、Mの会で他の「在日」とかかわることが、「在日をする」自己を確認していく重要な場面であるからだろう。尹恵美子にとって、小、中学校を通して(地域)子ども会でかかわり続けたMの会は、「なんで通名にしたのか、今は整理つかへん」「『日本人やったらよかったな』って思った」という彼女を、そのまま受け入れてくれるかけがえのない居場所なのである。Mの会では、彼女は「在日」としての悩みを、他の「在日」も自分と同じように経験してしてきた(していく)であろうことを「暗黙の了解」としているからこそ、「在日をする」自己を確認することができるのである。彼女は、中学校入学を期に民族名にしたときも、高校入学を期に日本名にしたときも、「在日」としてのアイデンティティを問われる状況を回避できることを期待していたと思われる。しかし、実際は

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

民族名にしても、日本名にしても彼女の期待したとおりににはならなかった。彼女にとって、Mの会で名前を変えた経緯を語ることは、期待したとおりにならないことが、自分だけでなく、Mの会の他の「在日」も同じなのだということを確認する意味があったのである。

IV 「在日」的な生き方に対する意味付け

本章においては、「在日」の若者が「在日」的な生き方をどのように意味付けているのかを見ることによって、どのように「在日」としてのアイデンティティを維持、管理しているのかを見ていく。ここであげている二人の若者（朴和明、高英寿）は、民族名で生活し、朴和明は郵便外務職員であり、高英寿はMの会指導員（「T市在日韓国・朝鮮人事業」の非常勤職員）である。

俺、チェサ嫌いやねん。正月，旧正月，お盆やろ？ あとはおじいちゃんの命日とおばあちゃんの命日。親戚で死んだ人いたらその命日。金はかかるし，面倒やし。そんなに伝統，伝統言うんやったら，お前から本名にせえっちゅうねん。俺らの代には絶対チェサなくすねん。

[朴和明（パク・ファミヨン），26歳，1996年8月29日]

朴和明は、両親や親戚がチェサ（法事）という伝統にこだわる反面、「在日」であるということを周囲に隠して生活しているということ、この「在日」的な生き方への反発の意味で言っている。彼の両親や親戚にとっては、チェサなどの民族的伝統行事を行っていくことが「在日」同胞としての集団帰属の確認の意味、つまり「在日をする事」であるのに対して、朴和明自身はチェサを継承していくことよりも民族名で生活していくことに「在日をする事」の意味を見出している。だからこそ、彼は「伝統伝統いうんやったら本名にせえ」と言い、伝統行事へのこだわりを否定する一方で、民族名を使用することに、「在日」として生きることへの強いこだわりを示しているのである。けれども、彼の「俺らの代には絶対チェサをなくす」と

いう決意の表明は、将来的には、自分も両親や親戚のように、チェサを行う「在日になる」かもしれないという運命的な予感が込められていると解釈できるのではないだろうか。なぜならば、彼は、自分の両親や親戚のような「在日」的な生き方に対して反発しつつも、彼自身が同じような生き方をするかもしれないことに気づいていると思われるからである。

朝鮮人って、トラックとか、ダンプの運転手とか、土方とか、肉体労働やってる奴多いやん。親父かてそうやったし、親戚も周りの友達もみんなそう。若いときはやんちゃやって、シーマとかクラウンとか、しかも白のなあ、乗り回してなあ。俺、そういう「いかにも朝鮮人」っていうのが嫌でなあ。絶対、ああはなりたくないって思った。

[高英寿(コ・ヨンス), 25歳, 1995年12月27日]

高英寿は、自分の周囲に肉体労働に従事し、「若いときにやんちゃして、白のシーマやクラウン乗り回す」という「在日」が多かったことを、「在日」的な生き方に対する反発として語っている。ここで、高英寿は「肉体労働やってる」「若いときにやんちゃして」「白のシーマやクラウン乗り回す」ということを「いかにも朝鮮人」と表現し、それを嫌だと否定している。けれども、彼の「絶対、ああはなりたくないって思った」という過去形の表現からは、彼自身が、自分で嫌だと思ってきた「いかにも朝鮮人」という「在日」的な生き方をする(すでに行っている)かもしれないことに気づいていることを窺い知ることができる。

上記のデータは、それぞれ異なった場面で得たものであるが、誰かが彼らに対して、「在日」としてどのように生きていくのかを聞いたわけではない。にも拘わらず、わざわざ朴和明は「俺らの代には絶対チェサをなくす」という決意を表明し、高英寿は「絶対、ああは(『いかにも朝鮮人』風には)なりたくないって思った」と語っている。上記の二人に共通しているのは、それぞれが否定してきた「在日」的な生き方を、自分もする(している)かもしれないことに気づいている点である。それゆえに、敢えて上記の場面では、彼らは従来の「在日」的な生き方とは異なった生き方を

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

することに、「在日をする」ことの重要な意味を見いだしているかのように語っているのである。しかし、私が彼らを見てきた限りでは、朴和明は自分の両親や親戚のような「在日」的な生き方に対して反発しつつも、積極的にチェサをなくそうとはしていないし、高英寿は「いかにも朝鮮人」という「在日」的な生き方を否定しながらも、「若いときにやんちゃやってた」ような風貌である。上記の語りは、彼らの意図とは無関係に、周囲の「在日」の「在日」的な生き方を目の当たりにすることで、自己を問われる状況に遭遇せざるを得なかったこと、そして彼らが望むと望まざるとに拘わらず、「在日になる」ということを示している。

V 結びに代えて

多くの「在日」が、自らの出自を隠し、日本名を名乗って生活してきた（生活させられてきた）日本社会において、「在日」をめぐる運動や人権教育では、民族名を名乗り、自らの出自を明らかにして生きていくことは、自らが「在日」であるということに誇りを持って生きていくために、そして日本人の「在日」に対する差別や偏見をなくしていくために必要なことの一つとして位置づけられてきた。実際、Mの会では発足当初から中心を担ってきた人達をはじめ、青年部のメンバーや子ども会指導員の中には⁹⁾、「在日」ということに誇りを持って生きていくためや、日本人の「在日」に対する差別や偏見をなくしていくためという「目的」を持って、民族名を名乗っている人達もいる。その一方で、「在日」であることを徹底的に周囲に隠して生きていくために、日本名を使用している人たちもいる。けれども、

9) Mの会には、子ども会出身者を中心に構成されている、高校生部会と、青年部がある。高校生部会とは、Mの会で行われている、「在日」の高校生を対象とした集まりのことであり、青年部は、高校を卒業した人を対象とした集まりである。しかし、年々、それらに集まる若者は減っており、進学、就職を期に、新たな人間関係が構成されていく過程で、「在日」同士のつながりを作っていくのが困難な状況にある。いかに「在日」同士のつながりを作っていく、次代を担う若者を育てていくかが、Mの会の高校生部会、青年部の課題の一つとなっている。

本稿で示したように、民族名を使用しても、まわりの日本人から「在日」であるということを説明しなければならない状況へと追い込まれる場合もある。また、日本名を使用すれば、民族名で生活する「在日」からは、その理由の説明を求められる場面に遭遇してしまう場合もある。それは、日本社会において、「在日」本人の意図する事とは無関係に、結果として、民族名で生活することが「在日」であることを積極的に明らかにしていることと解されたり、日本名で生活することが「在日」であることを隠していると解されたりするからである。

本稿で示してきた「在日」の若者達は、「在日である」ことによって、「在日」としての自己を問われる場面に遭遇した際、「民族名の使用」「国籍へのこだわり」「帰化しないという決意の表明」「父親の民族名の発見」「従来の『在日』とは異なった生き方」などの様々な方法で「在日をする」ことによって、自己のアイデンティティを管理・維持していこうと試みていると言える。

最後に強調しておきたいのは、尹恵美子にとっては、「民族名から日本名へと名前を変える」ということが、まさに「在日をする」ことにほかならなかったということである。

でも、(中学の時の)ホームルームのことは、すごいうれしくて「もう通名でいいかな」って思った。……一応、高校受験は本名でしてんけど、高校の説明会のために、書類出すのに、本名にするか通名にするかで迷って、オカンが、中学入るときは「本名にするな」って言うたのに、高校入るときは「本名にしい」って言うてて、不思議やってんけど、なんか変わったんやろなって思った。(本名にするか通名にするかで)学校(高校)でオカンと喧嘩になってんけど、無視して通名にした。……高校は、H中から行ってる子は、ほとんどいなくて、友達にも知ってる子がいなかったし、H中の子は、「高校でも本名でがんばって」って言ってくれたけど、結局、通名にしてしまった。お兄ちゃんとはほとんど普段は口きかへんねんけど、オニイが「どっちにすんねん？」って聞いてきて、「お前な、高校に行ったら友達いっぱい

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

できるから、通名にしい」って、わけのわからんこと言われて、「それじゃ、通名にしようかな」って、オニイの影響受けてしまった。……高校生部会にも、全然行ってなかったし、高校はいい意味でも悪い意味でも自主性に任されてるっていうか、「高校生部会来うへんか？」って言われても「あ、高校生部会か」っていう感じで、気にしてなくて、考えんくて。高校では思ったこと言わんくていいし、考えなくていいし、楽やってんけど、でも考えなって思ってた、誘われてから高校生部会に行きだしてん。子ども会で知り合った子を捨てるのかっていうと、それも全然できひんし、この場にいる、こういう風に出会った人を大切にしたいと思うし、高校生部会では何もやってないけど、今まで「在日」として生きてきたし、これからもそうしていこうと思います。
[尹恵美子, 1997年8月27日] (括弧内筆者)

上記における彼女の語りは、民族名から日本名への名前を変更したことを説明する言説としては明らかに矛盾している。けれども、この矛盾が「在日であること」によって規定されるものであり、日本社会の矛盾によって規定されていると考えるのであれば、この矛盾は、彼女自身が「在日をする」自己を素直に表現しようとした結果として抱え込まざるをえないものであったと私には理解できる。

文 献

- Berger, Peter & Luckmann, Thomas, 1966, *The Social Construction of Reality: A Treatise in the Sociology of Knowledge*, Doubleday & Co.=1977, 山口節郎訳『日常世界の構成 アイデンティティと社会の弁証法』新曜社
- 福岡安則, 1993, 『在日韓国・朝鮮人 若い世代のアイデンティティ』中央公論社
- Goffman, Erving, 1963, *Stigma: Notes on Management of Spoiled Identity*, Prentice-Hall=1984, 石黒毅訳『スティグマの社会学 烙印を押されたアイデンティティ』せりか書房
- 市村弘正, 1994, 『ちいさなものの諸形態 精神史覚え書』築摩書房
- 狩谷あゆみ, 1998, 「在日韓国朝鮮人に『なる』ということ アイデンティティを中心にして」甲南女子大学大学院社会学研究室『社会学研究』16: 31-48
- 金明秀, 1995a, 「在日韓国人の学歴と職業」大阪大学人間科学部『年報人間科学』16:

39-55

金明秀, 1995b, 「エスニシティの形成論 在日韓国人青年を事例として」『ソシオロジ』 40-2 (124): 97-113

金泰泳, 1998, 「アイデンティティ・ポリティクス超克の〈戦術〉 在日朝鮮人の子ども会活動の事例から」『ソシオロジ』 42-3 (131): 37-54

町村敬志, 1999, 『越境者たちのロスアンジェルス』 平凡社

西澤晃彦, 1996, 「『地域』という神話 都市社会学者は何を見ないのか?」『社会学評論』 47-1 (185) 47-62

狩谷：「在日である」／「在日をする」／「在日になる」

Summary

Identity of Young Korean Residents in Japan

Ayumi Kariya

Young Korean residents in Japan are forced to feel identity crisis at various scenes in Japanese society. Their identity could be jeopardised not only by the relationship between the Japanese people and them but by the relationship between other Korean residents and them.

I prepare the following four pillars to make clear how young Korean residents face their identity problem.

The first point I discuss is what meanings young Korean residents find in choosing their names and nationality. Secondly, their way of maintaining identity will be mentioned, because there can be much possibility for them to feel identity crisis as Koreans in a daily life. Thirdly, their cultural insecurity will be referred. It makes no difference for them whether they feel inclined to be assimilated into Japanese society or try to cling to their racial identity, and they cannot avoid being thrown into conditions of cultural insecurity, particularly at important stages in their life career. Fourthly and finally, I take a look at how they try to get out of conditions of cultural insecurity.

Throughout this paper, I am sure, an aspect of minority problems in Japan is clearly featured.